
カレー

小日向ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カレー

【Nコード】

N1855K

【作者名】

小日向ひなた

【あらすじ】

ある日突然豹変した夫、日々の暴力はエスカレートしていく。

その暴力に若き妻は我慢を強いられる続ける。

夫から受ける暴力は、子供にまで及ぶのか？

妻は、夫の暴力に耐え続けることで人間としての尊厳さえ奪われていく。

妻が最後に選ぶ道は一体何なのか？

日常、誰もが作るカレーをベースに妻の心情を描いています。

さあ、貴方ならどうしますか？

（前書き）

優しく穏やかな若き青年との結婚。それは明子を満足させる生活だった。

ところが、ある日突然夫は豹変し、その日を境に夫からの暴力に耐える日々が続く。

明子はそのDVに、どう対応していくのか。

明子を選ぶ道は何か？

妻は、夫の暴力に耐え続けねばならないのか？

人間でありながら、夫に否定され続ける事の苦痛。

それが明子にどんな決意をいだかせるのか・・・

カレーは好きですか？

明子は、窓の外に目を向けた。

「カレーは好きですか？」

ずっと昔、もう10年も前に一人の男性が明子に聞いてきた言葉だ。

明子は、にっこりと微笑んで、小さく頷いた。

男性は嬉しそうに、明子と目を合わせた。

その男性とこんな生活を送るようになるとは、夢にも思わなかった。

男性の名は、本郷聡。

明子より4歳年上だった。

明子は大学を卒業して、A商社に入社した。その明子の先輩で、仕事を教えてくれたのが、聡だった。

聡は、毎日アイロンの掛かったシャツを着て、明るい笑顔を明子に向けてきた。

口元からこぼれる白い歯。優しい言動。思いやり溢れる対応。

どれをとっても、新卒の明子を魅了するに足るものだった。

二人は、時を待たずに恋人同士となった。

職場恋愛は気を遣わざるを得なかったが、それでも仕事帰りのデートは明子を満足させるものだった。2ヵ月後、聡は明子にプロポーズした。

明子も快く受け入れた。

22歳の明子には、全てが夢のようだった。

すぐに聡の母親に紹介された。母親は、大変明子を気に入り、まるで本当の娘のように可愛がってくれた。二人で式場を決め、ウエデ

イングドレスを決めた。

招待客は仕事の関係上、聡の客が多く自分の友達の人数を減らさねばならなかった。

しかし、そんな事は明子には大した事には思えなかった。

聡の甘い声が「すまないね」と囁いただけで、明子は聡の為なら、どんな事でも我慢できると思ったのだった。

知り合って半年。

入社して半年。

明子は華々しく結婚退職した。

それは誰もが羨み、誰もが嫉妬する展開となった。

明子は、わずか半年でOL生活を捨てたのだったが、それでも幸せだった。

「俺が、明子を幸せにするから、明子は働かなくていいんだよ」

「明子は、家庭を守ってくれば、それだけでいいんだ」

明子の耳元に聡の息が掛かる。

優しい聡との結婚生活が、明子を有頂天にさせた。

それはまるで、夢に描いていた結婚生活だった。

明子は、窓に向けていた目をまな板へと落とした。

「あれが、全ての始まりだったのよね。若すぎたわ。22歳よ」
ため息が漏れる。

「何も分らないまま、恋に恋して、たった半年で結婚して。バカよね・・・」

まな板の上の人参が妙に赤く見える。

その時、風呂場からシャワーの音が聞こえた。

体が強張る。

だが、人の気配がするはずは無い。まだ、2時を回ったばかりだ。平日の2時。

自分以外に誰も居ない家。

明子は体の力を抜き、深いため息を吐いた。

ゆつくりと包丁を置き、風呂場へと向かう。

（そうよ、この家の中には私しかない！）

そう考えながらも、夫聡の声が今にも聞こえてきそう。

風呂場のドアを開ける。

シャワーが熱い湯気を立てながら、怒り狂ったように流れ出している。

記憶が蘇る……。

結婚して半年が過ぎた頃、聡が仕事から帰るとすぐに風呂場に向かった。

いつもと変わらない日常……のはずだった。

明子は着替えを手に風呂場へ向かった。その時、聡の怒鳴り声が聞こえた。

始めて聞く、聡の荒々しい怒りに任せた声。

始めは何を言っているのか理解が出来ないくらいだったが、とにかく風呂場へ急ぐと、そこには上半身裸の聡が仁王立ちになって待っていた。

目は釣りあがり、顔は真っ赤になり、何がどうなっているのか明子には理解ができない。

聡は、明子を見ると怒鳴った。

「お前は一日中何をしてるんだ！」

あまりの怒りに声が割れ、聞こえ辛かったのもあったが、何よりも聡の口からそんな言葉が飛び出すということの方が信じられず、理解が出来なかった。

やっと、出た言葉は余計に聡を怒らせるものだった。

「何って……？」

「バカ野郎！夫が仕事で疲れて帰って来てるというのに、これは何だ！！」

聡が指を指す方に目をやると……

そこにあるのは、いつもと同じ桶。

「桶がどうしたの？」

「どうしただって?! お前は俺が仕事をしている間に何をしてた!」

「何って、掃除して・・・汗をかいたから・・・」

「そうだ!」

聡の口元がゆがんだのが分かった。

「お前は、俺よりも先に風呂に入るのか？」

嫌らしい目だった。

獲物を見つけた喜びと、これからどう料理しようかと楽しんでいる悪魔の様な目。

「だって、汗をかいたのよ」

本当だった。その日は5月に入っただけだというのに、その年一番の暑さで、掃除をしていれば汗が流れた。

汗をかいたまま、一日を過ごすなどという事は、明子には耐えがたかったし、聡が帰って来て、汗臭い奥さんなど嫌であろうという思いやりでもあったのだ。

ところが、聡はそれが気に入らないらしかった。

夫が大変な思いをして仕事をしているのに、妻がのうのうと昼間から風呂に浸っているなど、とんでもないというのだ。

これ以上、何を言っても今の聡では聞く耳を持たないと判断した明子はただひたすら謝った。

とにかく、今の状況を好転させたかったし、終わりにさせたかったのだ。

この日を境に、全てが変わって行ったのだった。

明子は、シャワーの蛇口を回した。

ゆっくり・・・ゆっくりと・・・

徐々に、熱いシャワーの勢いが緩やかになり、終いにはシャワー口から数滴のお湯がこぼれて止まった。

風呂場には、熱気が立ちこめ、シャワーが転がっている。

明子はシャワーを手に取り、シャワー掛けに掛けた。

「このままだと、又聡さんに怒鳴られるわ。床を綺麗に拭かないと・・・」

体が強張る。

怒鳴られると思っただけで、頭痛がしてくる。

明子は、その場にうずくまった。しばらくして、頭痛が治まると顔を上げた。

「いいえ・・・もう、いいのよ」

立ち上がり、風呂場を見回した。口元にはうつすらと笑みが見える。

「ねえ、貴方。貴方は言ったわよね」

明子は風呂場を後にし、台所へと戻っていく。

途中、居間が目に入った。整えられた部屋。塵一つ、髪の毛一本落ちていない部屋。

まるで、モデルルームのように整頓されている。

「お前は、片付けられない女だ！って」

どんなに片付けても、整理しても聡の気に入る状態には出来なかった。

いつそ、全てを捨て何もなくなれば片付ける必要がなくなると思った程だ。

そんな状態でも妊娠した。

明子にとっては待望の赤ちゃんだった。

TVドラマにあるようなシーンが明子を捕らえて離さなかった。

きっと、妊娠を期に全てが好転する。明子は、お腹の中の赤ちゃんを撫でた。

まるで、お腹の中にかつての幸せの素が入っているように、撫でた聡が帰宅すると、すぐに妊娠のことを告げた。これで、聡はきっと明子を抱き寄せ、喜びに浸り、二度と自分を殴ったり、罵倒したりする事はなくなる。そう信じながら。

しかし、妊娠を告げられた聡は黙って風呂場へ行った。

（きっと、理解ができないくらいに嬉しいのね。）

明子は、自分が嬉しいのだから、夫も同じだと思い込んでいたのだ。ところが、一日経ち二日経っても聡の態度は変わらなかった。

何も変わらず、毎日罵倒され殴られた。掃除が行き届いていないと、聡が見ている前で雑巾がけをさせられた。酷い時には、雑巾がけをしている明子の頭にビールが注がれた事もあった。

「お前は、掃除すら満足に出来ないんだな。生きている事が不思議だよ、全く。」

と笑いながら。

（子供が生まれてくれば、生まれさえすれば！父親としての気持ちが生まれる。そうすれば、何もかも元に戻るわ！）

10ヵ月後、明子は待望の男の子を産んだ。

名前は、『太郎』と付けられた。

意味など全くない。聡の一言で全てが決まったのだ。

「名前？そうだな・・・面倒だ。太郎でいい。太郎にしる！」

明子は愕然とした。

子供の名前すら、面倒だと言うのか？

喚起して、必死に名前を決めるだろうと思いついてただけに聡の言動は許せるものではなかった。だが、明子には聡に歯向かうだけの気力はなかったのだった。

毎日、来る日も来る日も罵倒され、人権を無視され続けると、人は抵抗する事が出来なくなる。

まるで、自分が虫けらのように感じてくる。

「太郎も9歳ね・・・」

明子は、台所を見回して再び包丁を握った。

人参を再び切り出す。聡の命令通りの大きさに・・・

「今夜はカレーよ」

ジャガイモに手が伸びる。

「野菜の切り方。」

肉の大きさ。

材料を切る順番。

味付け。

どれも貴方に言われた通りよ……」

カレーを作るたびに言われてきた。

人参は一口代にしる！

ジャガイモは大きく切れ！

玉ねぎは最後だ！

肉は大きくとろける位に煮る！

ルーが固い！

これじゃ、スープじゃないか？！

ご飯が柔らかい！！

その度に殴られた。殴った上に熱いカレーを掛けられた事すらある。

「俺の母さんのカレーは肉がたくさん入っているのに、どうしてお前のカレーは肉が少ないんだ？！俺は、ちゃんと稼いで来てるぞ？

お前が無駄遣いするから、肉が入らないんだろう！」

何かある度に「母さん」を連呼された。

他の家庭では、子供が出来れば子供に合わせてカレーも甘口になると言うが、そんな事は許されなかった。

ある時、太郎に辛いカレーは嫌いだと言われ、カレーを甘口にし、サツマイモとリンゴを入れた。

母親としての明子の優しさだったが、聡が許すはずがなかったのだ。サツマイモをスプーンに載せ、

「これは、なんという食材だろうねえ？」と明子を見た。

あの嫌らしい目で、嬉しそうに明子を見据えたのだ。

その瞬間（しまった！！）と明子は目を伏せ、小声で

「さ……サツマイモです」

声が震えるのが自分でも分かった。

「ほう、サツマイモが何でカレーに入ってるんだろっねえ？」

「太・太郎ちゃんか・・・辛いのは可哀想なので・・・」

「誰が稼いできてるんだ?!」

「はい、旦那様です・・・」

「そうだよなあ。それなのに、コイツはなんだ？」

リンゴがスプーンに載っていた。

「すいません、リンゴを入れたら甘くなるかと思って」

「バカな女だ!! 本当にお前はバカだ!! 俺の母さんは、こんなカレーは死んでも作らないのに、俺の結婚は失敗だったな!」

太郎がじつと、父親を見据えているのが目の端に入ってくる。

振るえ、血の気が引いていくのが分かりながらも、今、聡が暴れたら、太郎にカレーが掛かるかもしれない。その時は、どうやって太郎を守ればいいのか。

頭の中では、自分がどう動けばいいのかを必死に考えていた。

「俺に、こんな子供のカレーを食べろって言うんじゃないだろうな?」

「は・はい。すぐに作り直して来ます。」

「それまで、待ってるというのか?!」

「申し訳ありません。」

椅子が倒れる大きな音がした。次の瞬間、聡の拳が明子の頭を殴打していた。

鈍い音が明子の中で聞こえた。

椅子から、徐々に崩れる体をどうする事も出来なかった。

聡の足が明子の腹部を蹴った。

太郎が椅子から離れ泣いている。

(黙らせなくちゃ、太郎まで殴られる)

それが、最後の意識だった。

意識が戻った時は、深夜3時を回っていた。

頭に手をやると、大きなコブが出来ていたが、さし当たったの異常

はなさそうだった。

痛む体を無理やり起こし、明子はテーブルを片付け始めた。

（太郎・・・太郎は？）

部屋を見回す。

（居ない！）

居間へ移動する。足が思うように動かないが、壁を伝いながら、必死になって居間までたどり着いた。そんなに広い家でもないのに、これほど広く感じたのは始めてだった。

（太郎！太郎ちゃん！）

体の痛みを感じている余裕などなかった。

太郎がどうなっているのか、それが怖かった。

自分が気を失っている間に、夫が太郎に何かしなかっただろうか。不安が込み上げる。

居間を見回すと、ソファアの上に小さく丸まった体があった。

寝息が聞こえる。

顔に痣はない。洋服をめくってみるが、痣らしいものはなかった。

（よかった、太郎には何もしなかったのね）

安堵と共に、小さな太郎がソファアで何も掛けて貰えずにうずくまっているのが不憫でならなかった。泣き寝入りしたのだろう、頬には涙の跡がある。

足を引きずりながら、ひざ掛けを太郎に掛ける。

頭を撫でながら、自分の頬に熱いものが流れるのが分かった。

台所へと戻り、テーブルを眺める。

（早く片付けなくては、あの人が起きてきてこのままだったら、大変な事になる）

恐怖が蘇ってきた。

早く、早く片付けようと思うのだが、何故か手が動いてくれない。涙が流れ続け、情けなさが込み上げてくる。

（どうして結婚したのだろう。たった半年で結婚を決めるなんて、なんて浅はかだったのだろう。）

自分の為に、太郎まで辛い思いをさせて……）
自分を責めた。

若さゆえの愚かさだったとしても、幼い我が子に辛い思いをさせている。

その現実が明子を捕らえて離さなかった。

（別れよう……）

明子が離婚を決意した瞬間だった。

第三章

エリートの夫は離婚を認めなかった。

「離婚？」

ある休日の午後、新聞を読みながらくつろいでいた夫に明子は切り出した。

心臓は、早鐘のように打ち響き、今にも口から飛び出すのでは無いかと思うほどだった。

それでも、これ以上太郎に辛い思いをさせたくなかった明子は、拳を握り閉め恐怖と対峙した。

夫が暴れるかもしれない。

何をされるか分からない。

それでも、今を乗り越えれば、太郎も明子自信も自由になれる。

そう信じて切り出した言葉だった。

「離婚して……く……ださい……」

「離婚？」

夫は新聞から目を離し、明子を見据えた。その目は（コイツは、又面白い事を言い出したな。バカなヤツだ。）と笑っていた。

「離婚してどうする気だ？お前に何が出来る？働いた事もない女が食べていけると思っているのか？」

「じ・実家に……帰らせてください」

「ほう、実家と来たか」

聡の口元が歪んだ。

楽しんでいるのは、明子にも分かった。

「実家に帰ったところで、太郎はどうする？」

「太郎は私が育てます！」

「仕事もないお前に育てられると思っているのか？金がなければ養育は出来ないんだぞ！」

そんな事も分らないのか？本当にお前はバカだ！！」

「働きます」

「どこで？誰が雇ってくれるんだ？大学を出て、半年で仕事を辞めた女を雇うような会社があると思っているのか？」

「探せば……」

「大体、俺はエリートだ。俺が離婚したら、会社はどうすると思う？」

「それは……」

「そうだ、エリート路線から外されるんだよ。分かるか？」

お前のような存在価値の全くない女に飯を食わせてやるという事で、会社は俺にエリートの道を約束してくれているんだ。それなのに、何故俺がお前と別れて、自分の人生を捨ててと思う？」

お前はそんなことも分からないのか？」

「でも……」

「お茶が飲みたいね。奥さん。」

明子は黙るしかなかった。

「お茶が飲みたいね」というのは、聡の最後通告のようなものだったからだ。

これ以上、うるさいことを言えばどうなるか分かっているだろうなと言っているのだ。

明子は、黙ってお茶を入れに行った。

それでも、離婚したい。どうしたらいいのだろう。

悲しみに沈みながら、急須にお湯を注ぎ、湯のみにお湯を満たした。

急須も湯飲みも温めてからでないと、入れたお茶がぬるくなる。

聡は、そんな些細な事も許さない人だ。

（そつだ、弁護士に相談してみよう）

弁護士に相談すれば、何か言い考えがあるかもしれないと、明子は自分に言い聞かせた。

その通り、後日明子は知人の紹介で弁護士事務所を訪問していた。

弁護士に、相談しているうちに涙が止まらなくなった。

あまりにも辛い生活を再確認している自分が情けなかった。

弁護士は、優しく今後の対応を教えてくれた。

弁護士事務所を出た時には、ある決心が明子の胸に芽生えていた。

それは、【離婚裁判】という四文字だった。

（その為には、日記が必要だ。どんな暴力を受けたのかを細かく綴らなくては！）

ところが、これが仇となった。

弁護士を紹介してくれたその知人が聡に話したのだった。

まさか、離婚騒ぎになっているとも知らずに。

弁護士と聞き、余程の自体なのだろうと思った知人は、温厚な仮面を付けた聡に

「奥さんは、黙っていて欲しいと言ったんだけどね。

大変な事になってからでは、困るだろうから。」

と報告してくれたのだ。

「そうか、ありがとう。最近、明子は何か悩んでいるようだったから、それでだろう。」

俺に言えないような、深い悩みがあったのだね。

可哀想に、すぐに相談に乗ってやるよ。

本当に、ありがとう。」

と知人に返事をしながらも、聡は明子が弁護士に何を相談しに行ったかは見当が付いていた。

帰宅した聡は、母さんが太郎に会いたがっているからと連れ出した。こんな事は始めてだったが、そういう事もあるだろうと、明子は気にしなかった。

とにかく、聡の機嫌を損なわない事の方が明子にとっては大切な事だったのだ。

太郎を母親に預けて戻ってきたら、地獄が待っているとも知らずに・
・・

「あの時、よく殺されなかったわね・・・殺されていたら、貴方は刑務所行きだったけど」

鍋にカレーのルーを入れかき回し始めた。

カレー粉が溶けるにしたがって、いい香りがたち始める。

殺されはしなかったが、入院することになった。

刃物こそ振り回されなかったが、ゴルフクラブが1本だめになった。

明子が血反吐を吐くと、部屋が汚れるといって風呂場へ連れて行かれた。

それでも暴行は続いた。

明子が気を失うと、冷たいシャワーが容赦なく掛けられた。

（これで終わりね。私は殺される。

その為に、太郎をお母さんに預けたんだ。

それほど、私が憎いなら・・・殺せばいい・・・。

それで私も楽になれる。）

しかし、ぎりぎりのところで聡は暴行を止め、病院へ連れて行った。善良な夫を装って。

夫は医師にこう告げた。

「私が帰宅した時に、怪しい男が窓から出て行くのを見えました。妻の姿が無かったので、探したら、風呂場でこの状態でした。

・・・妻は、妻は大丈夫でしょうか？」

と、泣きながら医師にしがみついたのだった。

「俳優になれるわね。」

明子はカレーの匂いが立ち込める中、うつすらと頬を歪ませながら、カレー鍋をかき回し続けた。

「あ！いけない。」

「……肉を入れて無かったわ」

明子は物置へ急いだ。そこには、真新しい業務用の冷蔵庫が置かれている。

冷凍室が大きく、明子が以前から欲しい物だった。

勿論、聡に相談して購入した訳ではない。

主婦が作り置きなんてふざけるな、というのが聡の考え方だった。専業主婦なのだから、時間は余りあるほどあるだろう。

毎日買い物に行つて、鮮度の良いものを家族に作つて出すのは当たり前なのだから、家庭用の冷蔵庫ですら不要なものだと言っていた。それでも、明子は大きな冷凍庫が欲しかった。

安い時に買つてきて、保存しておければ、経済的だし、作り置きしておけば、ちよつと外出してから料理するにも手間が掛からない。

しかし、許される筈は無く、夫を否定するような言動をすれば、暴力が待っているだけだ。

明子は黙つて、頃合を見計らっていた。

何とか、へそくりを貯めてまとまったお金を作り、聡に分からないように物置に設置したのだ。

明子は、念願の冷凍庫へと歩を進めた。

ゆつくりと、扉を開ける。

ぎゅっしり詰まった肉。

「これだけあれば、お肉の大好きな貴方だつて満足でしょう？」

一つ一つが丁寧にパックにされている。

その隅にあるのは、骨だ。

「これは、ラーメン用ね。スープのダシになるものね。」

明子は、大量の肉のパックから一つを手に取りニツコリと微笑み扉を閉めた。

台所へ向かいながら、

（このままでは臭みが残るから・・・下茹でしなくちゃ）

と言いながら、拳でパックを殴る。

口元からこぼれる笑みを止める事ができない。

パックから肉を取り出し、別の鍋にお湯を満たし火に掛ける。

解凍しながら、下茹でしてしまおうと考えていた。

湯が沸き肉を入れる。

熱い湯の中に肉の塊が沈んでいく。

笑いが込み上げて来る。

「これだけの肉が入れば、貴方は文句を言わないわね。」

後は、肉が柔らかくなるまでカレーと共に煮込めば良いだけだ。

「そつえば、貴方のお母さんのカレーに肉が沢山入るようになったのは、貴方が小さい頃からだったと言ってたわね。」

そつだ。

いつだったか、聡が話していた。

ある日、母親が楽しそうにカレーを作ってくれた。

「その日から、カレーには肉が沢山入るようになったんだ。」

母さんに、『こんなに肉を沢山入れたらお金が沢山掛かるよ。』

俺は、子供心に母さんにそう言った。

母さんは、『友達が肉屋さんに勤めてるから、安く手に入るのよ』
と言つて、笑つてたな。

お前にも、そういう友達が居たらよかったのに、俺は残念だね。」

その時、明子は何気ない質問をしたのを覚えている。何の意味も無い、世間話のつもりで。

「それじゃあ、お父さんは喜んだでしょうね。」

聡の家は、母一人子一人だ。

いつ父親が他界したのかは聞いた事が無かった。いつか聞こうと思っていたが、父親の話に触れようとすると聡の機嫌が悪くなるので、その時まで黙っていたのだが、母親のカレーの話をしていた時の聡の機嫌の良さから、今が聞く時だと明子はそれとなく話を振ったのだった。

すると、聡が

「ところが・・・その日、父さんは出張に出ていなかったんだ。それっきり、帰ってこなかったよ。」

鍋の中で肉が踊りだしていた。

明子は、一口代に切り分けられた肉をぼんやりと眺めながら呟いた。
「・・・・・・そういう事だったのね・・・・・・」

夕食の時間になっても、聡は帰宅しなかった。

久しぶりの太郎と明子だけの団欒。

明子は、太郎の好きな皿にカレーをたっぷり盛つけた。

いつもなら、父親の聡の皿には大量に肉が入り、太郎と明子の皿には申し訳程度の肉が入る。

いくら商社のエリートと言っても、それほどの贅沢はできないし、何より聡と同じ量の肉を皿に盛れば、聡の怒りを買うことは太郎であつても分かっていた。

だから、太郎はいつも父親の皿に山のように盛られる肉を横目で見ながら、自分の皿に乗っている肉を大切に食べていたのだ。

それが、今日は大量の肉が太郎の皿に乗っている。

太郎は目を疑った。

太郎の目が「いいの？」と、明子に聞いているのが分かる。

明子はニツコリと微笑んで、

「いいのよ。これからは、太郎ちゃんにも好きなだけお肉を食べさせてあげられるわ」

「どうして？」

「ママのお友達に、お肉屋さんにお勤めしている人がいてね、安く買えるのよ」

「そうなの！？」

太郎は嬉しそうだった。

「あれ？パパは・・・？」

父親が不在である事など、まずあり得ないのだ。

例え、帰宅が深夜に及んでも、家族が食事をせずに待たねばならない。

それが、父親が食事の席にいないと言うのが不思議だった。

「パパ？出張よ。しばらく帰ってこないわ」

「そうなの！？」

太郎の目が輝きを増した。

しばらく帰ってこないという言葉は、太郎にとって

しばらくは父親の怒鳴り声も、暴力も無い平和な時間がやってくるという事だ。

明子はニツコリ微笑み、太郎に伝えたい本当の言葉を飲み込んだ。

「パパ？ もう、帰ってこないわ。」

【 完 】

（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

この作品は、処女作です。

ふと、日常誰もが作るカレーを題材に、夫への報復を考える妻の心情を描いたら面白いのでは無いかと思い、書き上げました。

処女作のため、稚拙な表現が多く、読みづらいとは思いますが、最後までお読みいただいた感想などを聞かせていただけると、次回作の参考になりますので宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855k/>

カレー

2011年10月6日20時37分発行